

「子規俳句」に見られる律の姿

風 間 勢 津 子

目次

はじめに

第一章 病との闘い

第一節 発病から死まで

第二節 病床隨筆

第三節 闘病生活の中で

第二章 子規の女子訓

第一節 「病床六尺」に見られる女子訓

第二節 律と女子訓

第三章 律の姿

第一節 兄妹

第二節 俳句に見られる律の姿

第四章 律への思い

おわりに

はじめに

子規は俳句、短歌、評論等幅広い分野で多彩な才能を発揮し、三十五歳の若さで他界した。しかも、晩年、彼は長い病床での生活を

強いられたのだが、凡人のようにただ呆然と迫り来る死を待っていただけではなかった。死の訪れる十二時間前まで、寝返りすらできない体に鞭打って筆を取り続けたのである。私はいつしか、私のものを遙かに上回る、彼の強靱な精神力に魅かれていったのである。

もちろん、それは子規一人の力で成し得たことではなかった。

看病の我をとりまく冬籠

とあるように、そこには、老いた母と、三才離れた妹・律の姿があった。彼女たちの献身的な看病があったからこそ、子規は心おきなく、

冬籠あるじ寝ながら人に逢う

ということができたのである。虚子ら多くの友人達と、彼らが子規のために持参した土産を食べながら、和やかに談合し、気晴らしもできたのである。

縁の下の力持ち的な存在であり、表にはあまり現れることのない律ではあるが、恐らく彼女なしでは子規が大成することはありえなかったであろう。そんな律の姿を、子規の俳句を通して見つめてみようと思うのである。

第一章 病との闘い

律は常に子規の看病人であった。そんな彼女を知るためには、まず子規を知らねばならない。しかもその子規は、俳人としての、あるいは、歌人としての子規ではなく、病人としての子規なのである。

第一節 発病から死まで

近代文学史の中でも稀にみる傑物とされる子規は、その文学活動をほとんど激痛の絶えない病床において行っていた。国木田独歩、樋口一葉、石川啄木らを早逝せしめたのと同じ結核に罹ったのである。

運命の日となったのは、明治二十二年五月九日であった。二十二歳の子規が突然咯血したのである。この日から、悲壮な、長い闘病生活が始まったのである。

明治二十八年、子規は自分の病状が決して良くないことを知りつつ、無謀にも従軍の計画を立てた。子規が夢中で発刊していた『小日本』新聞（『日本』新聞の姉妹紙）が廃刊せざるをえなくなった頃、日清戦争が起きたのだ。従軍すれば、短い生命を一層短くするに違いない。しかし彼は周囲の反対を押し切り、四月に日本を離れ旅順に向かったのである。ところが子規の病気は、出発後僅か一月にして再発してしまい、すぐに帰国の途につかねばならなかった。神戸病院に入院してからも一日に数回も血を吐き、主治医が危篤と報告したこともあったほどである。

明治三十二年五月、子規の病状はにわか悪化した。それまでに腰部脊髄炎を併発し、歩行すら困難となっていた。また、この時には腰部の口からあふれでいた脊髄炎の膿が、一つの口からだけでは排泄しきれなくなって、肛門の傍に新しい口を作り、三十九度を越える熱が続く危篤状態に陥ったのである。一時は絶命と思われ、家族も門下生も半ば諦めていた。

しかし、肉体はすでに死んだと同じほど衰弱していた子規であったが、彼の精神は精一杯生きようと努力していたのである。彼はついに二十日も続いた危篤状態から脱したのである。しかし、その後も病状は刻々と悪化していった。脊髄炎の膿が排泄する口の数は、六・七個に増え、歯茎からも膿が流れるほどであった。背中から腰、肛門にいたるまで、死にそうなほどの疼痛が押し寄せ、痛さのあまり、眠れぬ夜が何日も続いたのである。幾度となく危険な状態を乗り越えた強健な精神力を持つ子規も、すぎましい病勢に打ち勝つことのできなくなる時が、近づきつつあったのだ。

そしてついに、明治三十五年九月十九日午前一時過、僅か三十五歳の若さで、この世を去ったのである。長い間、病魔と悪戦苦闘してきた人の最後とは思えぬほど、それは安らかな往生であった。

第二節 病床隨筆

いったい子規という人はひじょうに筆まめで、激痛や高熱の日でもほとんど筆を持たない日がなく、何やかやと書き記しては自らを慰めていた人である。そのため、これらの隨筆は、他の文学者の隨筆とは大へん趣きを異にして、種々雑多な内容――子規の主張、思想、感情、学問など――を盛りこんだ、それだけ

に全体の統一性を欠くが、子規という人間を知る上にはぜひとも必要なものである。

(松井利彦『人と作品 正岡子規』)

本文中の随筆とは『松羅玉液』、『墨汁一滴』、『病床六尺』を指すが、広い意味では『仰臥漫録』を含めた四編である。

『松羅玉液』は明治二十九年四月二十一日から同年十二月三十一日まで、『日本』新聞に連載されたもので、四編の中でも最も古い随筆であり、かつ、連載された期間も一番長い。

『墨汁一滴』は明治三十四年一月十六日に始まり、同年七月に終わったもので、同じく『日本』新聞に連載された。この題名は、一滴の墨汁で筆を濡らし、それだけの墨で書けるような短い文章という意味で、実際そのくらいの文章しか書けぬほど、死の前年の子規の病状は無残であった。

『病床六尺』は明治三十五年五月五日から死の二日前の九月十七日まで書かれたもので、やはり『日本』新聞紙上に連載された。五月三日に虚子が口述筆記した、「病床六尺、これが我世界である。しかもこの六尺の病床が余には広過ぎるのである。」という見事な出しで書き始められている。

『仰臥漫録』は、先の三編の随筆と異なり公表の意志がなかったため、子規生前には親しい門下生さえ見ることができなかった、まったくの私記である。書かれた時期は、「墨汁一滴」に続いて筆を取り、「病床六尺」の途中で記事が絶えている。まったくの私記のため、内容も食事のメニューから写生画まであって、他に比べて一段と興味をそられる。

これらの随筆は、公表の意志があろうとなかろうと、「死」に直

面している重病人の作品とは言い難いほど、宗教などに逃避することもなく、すこぶる現実的である。だからその中に、私達は、病魔と闘う子規の姿や、その裏に秘められている病に怯える心を見ることができるのである。

なお、以後使用する「病床随筆」は、以上の四編を指すものとし、病床随筆からの引用の頁数は、それぞれ岩波文庫本によるものとする。

第三節 闘病生活の中で

子規は病気になってからというものの、旅することはもちろん、外を歩くことさえできなくなった。外界の事情を知りたいと思う気持ちは強いが、それを十分に満足させることができず、そのもどかしさから次第に、病床内に起こる些細な変化、例えば、

人は皆衣など更へて来りけり

と、見舞客が衣更えをして来ることで、夏の訪れを知るといふように敏感になっていったのである。彼は視点を外界の事情から彼の病床へと移し、俳句を詠んでいくようになった。

棚の糸瓜思ふ処へぶら下る

雨の日の皆倒れたる女郎花

秋の蠅追へばまた来る叩けば死ぬ

臥して見る秋海棠の木末かな

また、目に映る景色をすぐさま取り入れ、

栗飯や糸瓜の花の黄なるあり

真心の虫喰ひ粟をもらひけり
裸体画の鏡に映る朝の秋

美女立てり秋海棠の如きかな

と、見舞客から寄せられた粟や美人画に喜び、

栗飯や病人ながら大食ひ

かぶりつく熟柿や髻を汚しけり

と、食欲旺盛な自分に驚き、

人間はばまだ生きて居る秋の風

病床のうめきに和して秋の蟬

瘦骨をさする朝寒夜寒かな

と、病人である自分をしみじみと顧みたのである。

このようにして、子規は数多くの俳句を詠んでいった。しかし彼の「病床隨筆」から見ると、句を詠むことができたのはかなり気分の良い時だけで、日常にはそうでない時の方が多かったのである。

絶叫。号泣。ますます絶叫する、ますます号泣する。その苦その痛何とも形容することは出来ない

もし死ぬことが出来ればそれは何よりも望むところである、しかし死ぬことも出来ねば殺してくれるものもない

誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか、誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか

〔病床六尺〕69頁

ついに悲鳴を上げねば堪えられないほど、病魔は子規を蝕んでいたのである。

ここに到って子規はようやく病人としての本心をさらけ出している。心底、自分を楽にさせてくれる人が欲しかったに違いない。そして、その可能性を秘めた人物として律を見出したのではないだろうか。次の章で述べるが、子規が看護人のあり方について書いているあたりには、常に背後に律の姿が見え隠れし、そこにまた、教え導く兄の姿が見えるような気がするのである。

第二章 子規の女子訓

子規がどのような看病を求めていたかは、「病床六尺」に見ることがができる。その中で彼は、

一、教育は女子に必要な事

二、女子の教育が病気の介抱に必要な事

三、家庭教育の事

四、病気の介抱に精神的と形式的の二種ある事

という記事を、明治三十五年七月十六、十七、十八、二十日と、四日間にわたって書いている。子規が関連した記事を何日も続けて書くのは、特別に興味、関心を惹かれた時であり、この場合は、自分の世話をしてくれる者に教育があるかないかによって、看病の上手、下手が決まるために、子規にとつては重大な関心事だったのである。

この章ではまず、第一節で「病床六尺」に書かれている女子訓の説明をし、第二節でその女子訓と律との関わりを考えてみようと思う。

第一節 「病床六尺」に見られる女子訓

まず七月十六日の「教育は女子に必要である」という中で、「直接に病人の苦楽に係る問題は、家庭の問題である。介抱の問題である。」と述べている。つまり、病気で苦しい時でも、上手に看病してもらえれば痛みなど忘れられるのだが、看病が下手だと病人は腹を立てたり、大声で怒鳴りつけたりせねばならず、ただでさえ苦しいのに、余計な苦痛まで背負うことになるのである。子規の場合、看病してくれるのは母と律なのだが、彼女達は家事は上手でも、病人を慰めたり、話を楽しくする工夫ができず、その上に、病人の看病と庭の掃除と、どちらが急務であるかもわからないほど無教養だと言っているのである。

そして十七日、「女子の教育が病気の介抱に必要である」と前置きして、教育といっても看護婦としての修業などでなく、常識を持たせるといふ事だと述べている。その常識がありさえすれば、前日に述べたような仕事の緩急の区別もつき、看病をうまくするくらの工夫ができるようになるわけである。

更に十八日に、家庭教育が「一家を司つて、其上に一家の和案を失はぬやうにして行く事は、多くは母親の教育如何によりて、善くも悪くもなる」ために、特に女性に必要であると述べている。そして家庭教育の第一歩は一家団欒して平和を楽しむ事だとしている。そのような環境から子供は良き感化を受けるものだからである。このように場合によつては、家庭教育は学校教育より重要になつてくるのである。

最後に二十日、「病気の介抱に精神的と、形式的との二様がある」

事を述べている。「精神的介抱」というのは看護人が同情を持つて病人を介抱する事で、「形式的介抱」というのは病人をうまく取り扱う事、例えば薬を飲ませたり、背をさすったり、始終病人の身体の心持よいように傍から注意してやる事である。この両方の介抱が得られれば言う事は無いのであるが、どちらか一方しか選べないのなら精神的介抱を選ぶと子規は言っており、心を込めた看病を望んでいたのである。

子規がこのような女子訓を書いたのは、死の僅か二ヶ月前である。そのような切羽詰まった状態の中でこの記事を書いたのは、子規にどのような考えがあつたからなのだろうか。

第二節 律と女子訓

看護人は先づ第一に病人の性質とその癖とを知る事が必要である。けれどもこれは普通の看護婦では出来る者が少いであらう。多くの場合においては母とか妻とか姉とか妹とか一家族に居つて平生から病人の癩癩の工合などを善く心得てゐる者の方が、うまく出来るはずである。うまく出来るはずであるけれども、それも実際の場合にはなかなか病人の思ふやうにはならぬので、病人は困るのである。一家に病人が出来たといふやうな場合は丁度一国に戦が起つたのと同じやうなもので、平生から病気の介抱の修業をさせるといふわけに行かないのであるから、そこはその人の気の利き次第で看護の上手と下手とが分れるのである。

これは七月二十日の女子訓の最後の部分だが、ここで子規はあらためて自分の看護人として家族を見つめてゐる。女子訓の最後のま

めに登場した家族は、その内容に重大な関係がある筈である。以下、特に律を中心にして女子訓の意味するものを考えることにする。

『墨汁一滴』の明治三十四年五月十二日の記事に、子規が一人でも寝返りをうてるように算笥の環のような取っ手を家族に作らせる場面がある。ここでは子規が自分に便利良くするために提案したのであるが、本来ならば、子規の望みを彼より先に気付いて介抱してこそ「形式的介抱」となって、子規を満足させることができるのである。しかしこの時点では、まだ家族はそれを実行することができていない。そのため子規はまず自分から介抱の仕方を示し、それを実践させることにより、家族の教育をしていこうとしていたのではないだろうか。

また七月十六日の女子訓の中に、「新聞を読ませようとしても、振り仮名のない新聞は読めぬ。振り仮名をたよりに読ませて見ても少し読むと、全く読み飽いてしまふ。」と述べている部分がある。明治二十六年の句に、

妹に軍書読まする夜長かな

という句があるが、この頃は、子規が注意しながら見ていなければ律は子規が希望するほどすらすらとは本を読めなかったのだろう。妹がつまるたびに、まだ体を動かすことのできた二十七歳の子規は、いらだちながらも読み方を教えてやったに違いない。律に物を読ませる姿は、八年後の「仰臥漫録」の記事からもうかがえる。

『週報』俳句検閲の際一息に急いで見をはるため目痛くなり昨日などは新聞を読めば目痛み明けられず因って今朝は新聞を見ず少しばかり律に読ます

午前十時頃新聞を読ませる

(明治三十四年九月十六日)
(明治三十五年三月十二日)

子規は何年もの間、機会あるごとに、律を呼んでは新聞を読ませていたのだろう。そしてこの頃は、律の方も次第に上達し、子規が見ていなくてもかなりすらすらと読むことができるようになっていったのではないだろうか。

このあたりに子規の女子訓の一つの意味を認めることができると思うのである。それは単なる子規の理想ではなく、妹との日常生活から得た実感的な女性教育論と言えるのではないだろうか。もちろんそれは、病人である子規がより良い看病を望んでのものであるから、ある意味では自己中心的なものであるかもしれないが、結果的には律に介抱の仕方や、文字の読み方を教える事ができているのである。「病床六尺」の女子訓ほどには、律の看病が行き届いていなかったのか、という点、実際にはそんなことはないと思ふ。それを敢えてそこまで厳しく書いたのは、子規が、その記事を参考に律がより看護人としてふさわしくなっていくのを密かに期待し、同時に律を人間的により成長させようとしたのではないだろうか。

第三章 律の姿

『仰臥漫録』の明治三十四年九月二十一日に、律について書いた記事がある。その中に、

彼が再び嫁して再び戻りその配偶者として世に立つこと能はざ

という一文がある。幼い頃、兄の子規が喧嘩に負けて帰って来ると、相手の子供に石を投げに行く程気性の烈しかった律は、中堀氏、恒吉氏に嫁したのだが何れも不縁となり、戻ってからはずっと子規の看病に専念したのである。この章ではその律の姿を考えてみた。

第一節 兄 妹

繻帯は毎日一度取換へる。これは律の役なり。尻のさき最痛く僅に綿を以て拭ふすらなほ疼痛を感じる。背部にも痛み箇所がある。それ故繻帯取換は余に取つても律に取つても毎日の一大事である。

これは「仰臥漫録」の明治三十四年十月二十六日の記事で、律の看護婦としての仕事の一つが書かれているが、この記事からは看病の時の表面的な様子しか見ることはできない。その内面には高浜虚子の「柿二つ」で触れることができる。

「お前は意地悪く其處を拭くからいかん。」

「あらあんなことを。」

「お前が痛い泣くやうな聲を出すのが愉快なのだらう。」

さうに違ひ無い。さうでなければそんなに意地悪く其處を拭く筈が無い。」

「それでも此處が一番膿で汚くなってゐるのでありますもの。」

「馬鹿を言へ。そんな所迄拭かなくとも其傍迄拭いときさへすればええぢやないか。お前は痲癩が強いから、其處を拭いて私がアイターと言はぬと気が済まぬのだ。アイターアイター。」

それ言ふ口の下から遣るぢやないか。アイターアイターアアアア。」と彼は大きな聲を出して叫喚しながら涙をぼろ／＼と零した。

「もうこらへて呉れ。アイター／＼。」

「そんな事をお言てはどうすることも出来んぢやないかな。あたしどうしたらええのか判らん。」と妹も終に蒲団の上に顔を押し當てて泣き出した。

小説であるので、割り引いて考えなくてはならないのは当然であるが、このような遣り取りは、本人達は大真面目なのだろうが、第三者から見ると実にはのぼのとした温かさが感じられる。たぶん虚子もこの雰囲気を感じたからこそ、この場面を文章として残したに違いない。まるで、幼い子供達が兄妹喧嘩をしているのを見ているようである。

「たまらんたまらんどうしやうどうしやう」と連呼すると母は「しかたがない」と静かな言葉

(「仰臥漫録」明治三十四年十月十三日)

と比べると良くわかるが、ここに感じる母の強さ、偉大さといったものとはまた別の、お互いに同調するような微妙な心の動きが感じられるのである。そして、そのような感じがなぜ生まれるかと言えれば、やはりそれは彼らが兄妹だからなのである。

第二節 俳句に見られる律の姿

薪をわるいもうと一人冬籠

鍋に炭切る妹の手ぞ黒き

明治二十六年と二十八年に詠まれた句だが、この頃の子規は俳句革新などの文学活動を行っていたため、家事に加えて力仕事までも律が切りまわしていたのだろう。若い女手で薪を割り、薪を切るということに、律のわびしい境涯が浮ぶとともに、子規の妹に対する愛情と深い詠嘆が込められている。

誰かある初雪の深さ見て参れ

(明25)

障子明けよ上野の雪を一目見ん

(明29)

眠らんとす汝静かに颯を打て

(明30)

どの句も、正確には誰に向って言ったのかは判らないが、その命令的な口調、すぐ側にいる者でないといこの呼びかけには答えられないことから、おそらく律に言いつけたと思われる。

いもうとが日覆をまくる萩の月

(明30・秋)

病む人の佛間にこもる煤はらひ

(明30・冬)

病む人に戸をあけて見する吹雪哉

(明31)

この三句と前の三句を比べると判るが、子規が妹に命令する形をとっていた句が、妹の自発的な行いを詠んだものへと変化している。

いつも眼覚めた時する頻繁な咳が聞こえ始めたので妹は金盥と嗽茶碗とを持って来た。かたばかりの手水がすむと、障子が開け放されて病床の埃が掃き出されるのであった。障子を明け放つて日影が直に病床に落ちると敷布や枕の上にかよってゐる埃が目立って汚く見えた。其れを老母と妹はいつも気にして掃除した。

(高浜虚子『正岡子規』)

このように、律の看病がだんだん行き届いていったに違いない。そ

のため子規の欲求が満たされて、命令的であった句も、妹を認めたものへと変化していったのだろう。

短夜や我を見とる人うたゝねす

(明30)

蠅打を持って居眠るみとりかな

(明30)

病人の枕ならべて五月雨

(明34)

前二句は、(老母か律か、どちらとも考えられるが、この場合は律とする)子規の枕元に座って世話していた筈の律が、いつの間にか居眠ってしまった様子を詠んだ句で、後一句は、いつもは自分を看病してくれる側である律が病気で臥せているのを詠んだ句である。便意を訴える子規に夜中でも起こされることの多かつた律の、看病疲れにはっと一息ついた時間をよく把えており、普段は見られぬ安堵した一面が伺える。

病人のくひたきといふいちご哉

(明33)

白味噌や此頃飽きし納豆汁

(明33)

凧や燈燼にいもを焼く夜半

(明33)

仏を話す土筆の袴刺きながら

(明33)

子規はあれほどの大病人でありながら、非常に健啖家で、盛んにものを食べた。そして、これが食べたい、あれが食べたいと訴えては買い物に出かける律たちを困らせていた。

もう三ヶ月の運命だとか半年はむつかしいだろうとか言ふてもらひたい者ぢやそれがきまると病人は我儘や贅沢が言はれて大に楽になるであらうと思ふ死ぬるまでもう一度本膳で御馳走が食ふて見たいなどといふて見たところでは誰も取りあは

ないから困ってしまふ

『仰臥漫録』明治三十四年九月二十九日

もつともこの記事のように、いつも子規の願い通りというわけにはいかなかったようであるが。中でも三句目一後半になつて何か食べなくなつたので、好物の焼芋でも作つてもらおうと、母か妹を起こして芋を切つたのだが、夜中のことで火種もないので燈爐の上で焼いてみたというあたりは、子規の我儘に苦勞しながらも、やさしく対応する律の姿が想像できるのである。

妹の朝顔赤を咲きにけり

(明26)

妹が丹精込めて手入れをしていた朝顔が、目覚めて見ると鮮やかに咲いていたのだから。何色もあつたに違いない朝顔の中から赤い花を殊更詠んだのは、そこに律のイメージを重ねたためであろう。女らしさ、温かさ、やさしさといった感じを律から受けていたのではないだろうか。

薔薇の花マリーと呼ぶは妹なり

当時手に入りにくかつた薔薇の花を植えさせたのは子規だろう。しかし、律はすぐに目の前の豪華な中にも可憐さを秘めた美しい花に魅せられたのだから。愛称をつけて花を可愛がるあたり、幼さを秘めており、純真さが伺われる。この句の詠まれた明治二十六年は律はまだ二十四歳であり、それも当然のことであつたかもしれない。

秋海棠妹が好みの小庭哉

(明32)

秋海棠は画人、文人に好まれ庭に植えられていたが、この場合は律が子規を思つて育てたのだから。兄を氣使つたのだが、子規は良く

手入れのされ、目を楽しませてくれる小庭を、妹のように感じているのではないだろうか。秋海棠など庭の草花を詠んだ句が多いことから、子規の感謝の氣持が伺えるのである。

おしろいは妹のものよ俗な花

(明31)

妹が庭や秋海棠とおしろいと

(明32)

おしろい花は別名銀化粧とも言ふように、女性のなまめかしさを連想させる。そのおしろい花を妹のものと言ひ切つている所など、子規が律に女を見ているのがわかる。

灯をともし女なまめく切籠哉

(明28)

この句は、外出から帰つたのか、妹が切籠に火をつけたとたん障子に妹の姿が映つたのであろう。その姿にやはり女を感じた瞬間である。一生要ることのなかつた子規は女性に縁遠く、妹に女を見ることが多かつたのであろう。内に秘めた、女のなまめかしさを求める心が、間隙をついて現われた句である。

律のことを詠んだ句はあまり多くはないが、一句一句心の込められたものばかりである。僅か十五文字の中にこのような感情を込めたのは、それだけ子規が律のことを思つていたからだろう。次の章では、その子規の律への思いを見つみようと思ふ。

第四章 律への思い

律は理窟づめの女なり 同感同情のなき木石の如き女なり

律は強情なり 人間に向つて冷淡なり

特に男に向つて強情なり 彼は到底配偶者として世に立つ能は

ざるなり

彼は癩癩持なり 強情なり 気が利かぬなり 人に物問ふことが嫌ひなり 指さきの仕事は極めて不器用なり 一度きまった事を改良することが出来ぬなり 彼の欠点は枚挙に遑あらず余は時として彼を殺さんと思ふほどに腹立つことあり

これは、「仰臥漫録」明治三十四年八月二十日、二十一日の記事の一部である。ここを見る限り、律の欠点ばかりを集め、まるで今までの鬱憤をすべて晴らそうとしているかのように感情を爆発させている。「仰臥漫録」は私記であるから、心の片隅に押し遣られた本心が、人目に触れることのない安心感に、ふっと現れたのかもしれない。しかし、私に言わせれば、子規も病人に良くあるように我儘であったし、それに対応しようとするれば律くらい冷静で意志の強い女性でないと無理であったと思う。そしてまた、そのことは子規自身が一番良く承知していた筈である。

では、なぜ彼はこのような悪口を書いたのだろうか。私はこの部分に、いくら病人の我儘として考えても、あまりに悪口ばかりを重ねたようなわざとらしさや作爲的なものを感じたのである。そして、そう感じた時、子規の言いたかったことは、律の悪口などではなく、もっと別にあつたのではないかと思うようになった。それは『仰臥漫録』を更に読み進んで行くうちに確かなものとなつていった。

看護婦を長く雇ふが如きは我能く為す所に非ず よし雇ひ得たりとも律に勝る所の看護婦即ち律が為すだけの事を為し得る看護婦あるべきに非ず

律の悪口の間に影を潜めているものの、彼が本当に言いたかったのは、律への感謝の気持だつたのではないだろうか。

律は看護婦であると同時に お三どんなり お三どんであると同時に一家の整理役なり 一家の整理役であると同時に余の秘書なり 書籍の出納原稿の浄書も不完全ながら為し居るなり

言葉は悪いが、これは律への最高のほめ言葉と言えるのではないだろうか。律の看護婦としての仕事と、自分の仕事の手伝いまでやってのける強さに驚嘆し、一種の尊敬の念すら感じたのだろう。しかしその記事を誰も見る者が無いと判っていても、彼の本当の心を文章化することは恥しく、抵抗もあつたに違いない。時にはいらだち、時には感謝、これらが言えるのも、本当の信頼に支えられていたからだろうと私は思う。

しかして彼は看護婦が請求するだけの看護料の十分の一度だにも費さざるなり 野菜にても香の物にても何にても一品あらば彼の食事はをはるなり 肉や肴を買ふて自己の食料となさんなどとは夢にも思はざるが如し

これは前の文章に続く「仰臥漫録」の記事である。一見、律の看護婦としての有能ぶりを書いたもののように思われるが、実は律がこのようにつましく、佗しい生活をしなければならぬ原因である自分を情けなく思いながらも、それに堪えてくれる律に心から礼を述べたい心境の現れではないだろうか。明治三十四年の

土筆煮て飯くふ夜の台所

の一句は、その気持ちしが結晶したものである。

このように、密かに尊敬し、感謝の止まない律であるから、彼女が怪我した時の子規の慌てようといったらなかつただろう。

もてなしに栗焼くとして妹がやけど哉

餅切ると指切りし妹に胸さわぐ

明治二十九年、三十年の句であるが、子規の心配ぶりが目に浮ぶほどである。また、

もし一日にても彼なくば一家の車はその運転をとめると同時に余は殆んど生きて居られざるなり故に余は自分の病気が如何やうに募るとも厭はずただ彼に病なきことを祈れり

という記事が、それを裏付けている。子規が病気になってからというもの、力仕事から家計の遣り繰りまでしていた律は、この頃にはすっかり一家の中心となっていたのである。そしてまた、

母と二人いもうとを待つ夜寒かな

いもうとの帰り遅さよ五日月

この明治三十四年に詠まれた二句から、子規個人にとっても生活上においての律の占める割合が大きかったことが判るのである。律の帰りを待っているその姿は、妹を待っているというよりも、姉の帰りを待つ幼い弟のように不安でしようがないように思われるのである。

明治三十五年、子規はこの年、長かった病床の生活に終にピリオドを打つのだが、もう一つ、律への思いの最も込められた句も残している。彼の病床生活を常に支えてくれた律への思いはすでに、尊敬・感謝などの言葉で表現してみたが、これだけでは私には、まだ

まだもの足りないものがある。尊拝に近い、限らない感謝の念といった方がよいかも知れない。次の二句をあげることに、子規の律への限らない思いに代えたいと思うのである。

看病や土筆摘むのも何年目

病床を三里離れて土筆取

おわりに

子規の妹律が、子規の文章によって描かれたその姿は一見、強情で理窟づめで冷淡で木石のような女という、およそ最低のものであった。しかし、その前後を読むことにより私はその奥深く隠れてなかなか正体を現わさなかった律の女らしさや、やさしさに触れることができた。だが、律に関する記事や文献はあまりに少なく、そこから導いた私の見解は片寄つたものとなつてしまつたかもしれない。それでなくとも、女性である律に味方しがちで、個人的な感情を多く移入してしまつたし、また単なる想像やイメージで世界を広げてしまつた事も事実である。しかし、

母も妹も我枕元にて裁縫などす 三人にて松山の話殊に長町の

沿革話いと面白かりき (『仰臥漫録』十二頁)

と言つた家族の楽しそうな様子や、初めて喀血した時に、叔父恒徳にあて報告の中の

病氣之事母上ハシメ他の方々へハ可成御話無之様祈上候

という家を感じる深い気持が込められた文章に触れた時、私の考えも

あながち誤まりとはいえないことを確信したのである。

最後に、子規と律を結ぶ絆、つまり兄妹のほのぼのとした句を紹介して、この二人の本当の姿をもう一度見つけておこうと思う。

いもうとの袂探れば椿哉

(明25)

いもうとの羽子板すこし劣りたる

(明31)

妹に七夕星を教へけり

(明32)

七夕の色紙分つ妹かな

(明32)

参考文献

正岡子規『子規全集』第一卷(昭50・12、講談社)

正岡子規『子規全集』第二卷(昭50・6、講談社)

正岡子規『子規全集』第三卷(昭52・11、講談社)

正岡子規『墨汁一滴』(昭59・3、岩波書店)

正岡子規『病床六尺』(昭59・7、岩波書店)

正岡子規『仰臥漫録』(昭58・11、岩波書店)

高浜虚子『正岡子規』(昭18・10、甲書林)

斎藤茂吉『正岡子規』(昭18・12、創元社)

岡麓『正岡子規』(昭38・12、白玉書房)

楠本憲吉『正岡子規』(昭41・3、明治書院)

福田清人・前田登美『正岡子規』(『人と作品2』所収 昭41・3、清水書院)

久保田正文『正岡子規』(昭42・7、吉川弘整館)

久保田正文『正岡子規・その文学』(昭54・8、講談社)

松井利彦『正岡子規』(『新訂俳人シリーズ人と作品4』所収 昭54

・12、桜風社)

大野林火『近代俳句の鑑賞と批評』(昭56・10、明治書院)
桶谷秀昭『正岡子規』(昭58・8、小澤書店)

〔評〕

多くの参考文献にあたりながらも、それに振りまわされることなく、独自の視点から子規の俳句を分析して行ったこと、大変興味深かった。

子規発病以来の家族の世話、殊に律に焦点を当て、子規から見た律の姿を浮き彫りにして行ったこと、大変よかったと思う。が、欲を言うなら、他の資料により律の姿を客観的に示し、それとの比較の上に述べて行けたなら、なおよいものになったのではないだろうか。

ともあれ、根気よく俳句随筆を検討し、律のイメージを浮き彫りにした点、一つの立派な成果であると思う。(宇野憲治)